変容

（違っていると感じる）

暖かい嵐が埃を舞い上げる午後、薄暗い部屋に
腕を組み、しかも思考は原風景の中にはない
私自身が私であり、その見つめる瞳は私のものである

存在はそのまま生命であり、私の中に他者は居らず
外の乾燥したうなりが部屋を閉ざそうとする時
私は確かにこの部屋の外で駆けていた

（違っていると感じる）

鏡は既に粉々に割れ、私自身のまぶたの外には
映すものは何もなく、全ては安定の中にある
一致を超えたひとつの、ただひとつの存在

部分というものはなく、どれもが全体である
無感動に限りなく近い———精神の飛躍の静かなる自覚
開け放たれた自己が、歩き出ようとしている

（今、私が浮かべている表情など私には見えない
　そのことが喜ばしい）

これまでに出会った感情の全ては記憶の底へと沈み
これまでに体得した知の全ては無意識の奥へと潜み———
ただ前を向いていれば、そして歩きつづけるならば

論法と資料の不要な思考と、決断の不要
自然な流れのうちに溢れ出す力と———
知能が本能へと変容する時

（確かに違っていると感じる）

(1984.3.30)